

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連263載

いまさら「小1の壁」!?

「小1の壁」と聞いて、すぐにピンとくる人はどれくらいいるのだろうか。

これは、子どもの小学校入学に際し、夕方まで保育を担ってくれていた保育園と違い、子どもが午前中や昼過ぎに帰宅する状況になることから、母親がやむなく仕事をあきらめてしまうことを意味する。やめてしまわないまでも、仕事量を控えたり、職場を変わったりする人もいるが、これはひとえに小学校から帰ってきたとき、子どもが誰もいない家で長く過ごすことを申し訳なく思う気持ちによるものだ。そしてそういう立場にあるのは父親ではなく母親であ

る場合が圧倒的に多い。

しかし、仕事をし続けなければならぬときは、通称「学童」を活用する。学童の歴史は1940年代に民間保育園が手掛けたことにはじまるが、当初はほとんど認知されていなかった。時代の変化に伴い、国が本格的に学童に補助金を出し、法的な位置づけが行われたのは1997年のことだ。今では、放課後児童クラブと名を変え、学童で子どもたちと接する人を放課後児童指導員と呼ぶが、その身分は不安定で報酬もびっくりするほど低い。このような背景の中で、先日読売新聞の1面に「小1の壁、実態把握

へ」の見出しが目についた。さらに、「こども家庭庁が今秋、市区町村に対し、初めて全国調査に乗り出す。地域の取り組みや親の要望を把握し、適切な支援策につなげる狙いがある」とあって、いまさら? と、驚くとともにあきれてしまった。

見てきたが、誰も彼女らに責められない状況だった。

記事は、「親が先に出勤した後、自宅に1人で過ごし、玄関の鍵をかけて登校する子どもがいる」と続く。またもや、何をいまさら…、である。私は、いわゆるかぎつ子と呼ばれる世代だ。近くに学童もなく、首から紐で鍵を吊るし、朝晩みずから玄関の開け閉めを行っていた。でもそれをみじめだとか恥ずかしいなどとは一度も思ったことはない。むしろ、鍵を持つているということが大人に一步近づいたような気になり、得意げであった。物事に対する偏見というのは、大人の価値観から生まれ、一人歩きするものだと思わされる。



小1の壁は、数十年前から母親たちの頭を悩ませてきた。当時は、まだまだ専業主婦が多く、共働きやシングルマザーを低くみる傾向が強かった。文字通り心身を削る思いで過ごし、小学校入学と同時に力果て、家に入ってしまう母親もたくさん

近所には、かぎつ子がたくさんいた。ある日、そのうちのひとりの家に

数人で遊びに行つたときのこと。その子が慣れた手つきでキャベツをサクサクと千切りにし、塩を振りかけて皆にふるまってくれたのだ。その塩加減が抜群で、私はその子を見直した。彼女はいつもひとりですうやうと空腹を満たしていたのだろう。山盛りのキャベツはあつという間になくなった。今でもキャベツを見ると当時を思い出すが、あのキャベツの千切りほど美味しい味には出会ったことがない。

女性の労働力に期待すると言いながら、「小1の壁」の報道でもわかる通り、実態はお粗末そのもの。大げさにいえば、長年、国が国民に甘えてきた証左にはかならない。女性たちは十分に現状の中で頑張ってきた。余計な期待はせずに、まずはそのことを認めることが先である。

イラスト・伊藤香澄